

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ



野田九浦肖像
撮影：1950年代

画家・野田九浦が暮らした吉祥寺

大正から昭和にかけて50年近く武蔵野市吉祥寺に暮らした画家・野田九浦。描線を大切にした堅実な画風で多くの優れた作品を残し、日本画壇の重鎮として後進の指導にも力を注ぎました。没後50年を経た今、九浦と武蔵野市とのつながりを改めて見つめてみましょう。

日本画壇の重鎮が

長年暮らした自邸は

市民活動の拠点・コミセンに

明治・大正・昭和期にかけて活動し、歴史人物画の大家として知られた画家・野田九浦をご存じでしょうか。武蔵野市吉祥寺東町1丁目に建つ「吉祥寺東コミュニティセンター」は「九浦の家」の名で親しまれていますが、こゝは九浦が大正13（1924）年から昭和46（1971）年に91歳で死去するまで住んでいた自邸があった場所です。

九浦の死後、市が買い上げた土地は、昭和49（1974）年から「野田記念公園」として開放され、その後、昭和53（1978）年、市内で4番目のコミュニティセンターが建てられました。コミュニティセンターの建設は設計段階から市と市民との話し合いによって

進められ、「九浦さんが大事にしていたものをできるだけ残したい」という市民の声が反映され、庭は九浦が住んでいた当時の雰囲気可能な限り残した状態で整備されることに。このエピソードからも、九浦が武蔵野市民に尊敬されていた様子がうかがえます。

日本画壇に確かな功績を残し 後進の指導にもあたる

さて、九浦とは一体どのような画家だったのでしょうか。

明治12（1879）年、東京・下谷上根岸に生まれた九浦は、父・鷹雄の函館税関長任官に伴い北海道へ移住。明治28（1895）年、当時画壇で名をはせていた寺崎廣業の門下生になり上京し、東京美術学校（東京藝術大学の前身）に入学します。中退後、日本美術院の研究生となり、日本近代洋画

の父・黒田清輝（せいき）などが中心となつて設立した白馬会洋画研究所に通いデッサンを学んでいます。また、18歳から23歳まで正岡子規から俳句を学んでいたこともありました。明治40（1907）年、国が設立した官費による展覧会「文展」（文部省美術展覧会）の第1回到九浦が出席した《辻説法》（東京国立近代美術館蔵）が最高賞を受賞。九浦、28歳のときでした。

同じ年、九浦は大阪朝日新聞社に入社し、夏目漱石の『抗夫』の挿絵を手がけるなど、活動の幅を広げていきます。その後の文展「後に「帝展」（帝国美術院展覧会）にかわる」でも定期的に作品を発表し続け、画塾を設立して後進の指導にもあたりました。あわせて各展で審査員を務め、金沢美術工芸短期大学（金沢美術工芸大学へ移行）で教鞭をとるなど、日本画壇にいくつもの功績を残していきます。

師匠・廣業は、古典的な日本画の技法の中に西洋画の表現も加えた折衷的な画法に特徴があったといわれますが、九浦もそれを受け継ぎつつ、正岡子規の影響による自然主義的な世界の捉え方を自身の画風に持ち込んだ点に個性があると考えられます。また、動物物に対するまなざしも特徴的で、《山椽ぎ》（1955年）や自画像である《K氏愛猫》（1954年）は、人物画でありながら植物や猫の姿まで克明に描写しています。自宅で猿を飼っていたことがあると随筆で明かしていることから分かるように、どうやら生き物に対する愛情も深かったようです。

関東大震災を機に 混乱する都会を離れ

田園がひろがる武蔵野へ

九浦が武蔵野市に移り住んだのは大

正13（1924）年のこと。関東大震災での被災と息子が成蹊小学校に入学することが重なり武蔵野市に転居しました。しかし、その頃九浦の画室は根岸にあったため、往復2時間をかけて自宅から電車で通っていたといえます。〈車中時に窓外の風物に親しみ、時に想を構え、書を読むに最もよろしく、馴れては心気澄んで書斎にあるように、移動の時間も楽しんでいたようです。九浦の画塾の門下生にあたる吉岡堅二は、「九浦先生の想い出」と題した一文の中で、九浦が吉祥寺に移り住んだ当時のことをこう記しています。〈その頃は中央線の電車が中野から先へやっとのびた頃で吉祥寺の駅から秩父連山、富士山が遠望できる位で、人家もまばらな田園で麦畑の中にぽつんと画室が建てられたのを思い出す。〉

また、新多摩新聞社社長の小出勝雄も、九浦と九浦邸の思い出についてつづっています。〈野田先生の屋敷は広く、桜の木や孟宗竹がたくさん生えていて、季節がくると、あたりかまわず竹の子がむくむく生えてきたものである。野田先生はいつも口ぐせのように言っておられたことは、私が武蔵野にきた頃は、あたり一面麦畑と大根畑

で、それこそ家などはボンボンボンとあるだけで夜など淋しい位でキツネやタヌキが出たものであったが今こうして見ると武蔵野も随分発展したものであるとも語っていた。〉
大正から昭和へ、移り変わる武蔵野の景色を見つめながら、九浦は創作にこそしんでいたのでしょう。

没後50年を経た今

その作品と武蔵野市との関わりにふたたび注目が集まる

昭和46年の九浦の死後、その作品の多くが武蔵野市に寄贈されました。平成17（2005）年、武蔵野市立吉祥寺美術館で開催された九浦の企画展に付けられた副題は、「埋もれた歴史人物画の達人」。その案内文では、九浦について次のように解説しています。

〈九浦の画風は一言でいえば、穏やかで、激しく人の内面に訴えるようなものとは趣が異なるといえますが、しかし、その実直な作風は1907（明治40）年の第1回文展で最高賞を受賞して以

降評価され、文展、帝展、日展といった官展系で活躍し芸術院会員に推挙されました。しかし、そのあまりに地味な表現方法は、一般にはなかなか受け入れられることが少なく、美術界の中心的役割を果たしていた院展に属していなかったこともあって、いつしか忘れられ埋もれてしまった感があります。〉

九浦の没後50年にあたる令和3（2021）年、武蔵野ふるさと歴史館で開催された特集展示「没後50年 野田九浦展」では、武蔵野市に寄贈された作品を中心に、貴重な下図や吉祥寺東コミュニティセンターの設計図なども展示されました。

「九浦の死後、作品と遺品の多くは武蔵野市に寄贈されました。市民は、日本一の九浦コレクターと言えるでしょう。九浦の作品は、当時の日本画のあり方や日本の近代化を知る上で貴



野田九浦《K氏愛猫》1954年
（武蔵野市蔵）

重な資料です。同時に、現在とは違う美術の評価基準をもたらしてくれる可能性を秘めた作品でもあります。地味という評価はあくまで企画展開催時のものにすぎません。フェルメールですら1世紀以上忘れられていた時期がありました。ただし、その可能性を開かせるためには、さまざまな人が九浦の作品を実際に見て語る機会を持つことが必要です。九浦についての言説を増やすことは、九浦を掘り出すことにもつながります。また、絵を見るだけではなく、「九浦の家」の庭で、絵に描かれた草木を探してみても、当時の九浦に思いをはせることができるのではないのでしょうか。そのためにも、定期的に作品に触れられる機会を作ることが必要です。と武蔵野ふるさと歴史館の宮崎俊樹さんは語ります。

この春、武蔵野市立吉祥寺美術館では、17年ぶりに九浦の企画展を開催します（「野田九浦——自然」なること——令和4年4月16日から6月5日まで）。吉祥寺東コミュニティセンターが40年間にわたり「九浦の家」の名で地域の人々に親しまれてきた意味もかみしめながら、画家・九浦の作品と人となり、武蔵野市との縁を改めて見つめ直してみたいものです。